週刊ポスト　6月14日号

警鐘レポート

損切り、高値掴みで
あっという間に資産減！

新NISAで早くも しくじってしまった人たち

ブームに乗って投資デビューも「こんなはずじゃなかった」の声があちこちで

政府肝いりの新NISA
落とし穴が（左は4月
平均下落時の株価ボード

政府肝いりの「新NISA（少額投資非課税制度）」がスタートし、まもなく半年。世界的な株高を背景に投資意欲も旺盛だが、新NISAで投資デビューした人のなかには「こんなはずではなかった」と落胆の声を漏らす人も……。

＊

1月にスタートした「新NISA」は従来の制度と同様、投資で得た配当金や売却益にかかる約20％の税金が非課税になることが最大のメリットだ。加えて新制度では、年間投資上限額の大幅拡大（「つみたて投資枠」は年120万円、「成長投資枠」は年240万円に）、また非課税期間が無期限となり、より長期の資産形成がしやすくなった。

そうしたメリットを活かそうと、NISA口座の開設も増え続けている。日本証券業協会によると、主要証券会社10社の今年1～3月の新規口座開設数は約170万件に達し、前年同期の3・2倍に急増。ブームに乗り、新NISAで投資家デビューを果たしたものの、さっそくしくじってしまった人たちがいるようだ。

ひと月で20万円損失

知人の勧めで新NISAを始めたというA氏（59）が落胆する。

「3月初旬に新NISAの成長投資枠で、ある製紙会社の株（株価2300円）を200株、約46万円分購入しました。株に詳しい知人の意見やネットで情報収集し、長期的に有望と判断したからです。ところが、それから10日足らずで株価が下がり始めた。4月に入って株価が1300円まで下がったところで怖くなり、すべて売って損切りしました。結果的に1か月足らずで20万円も損失を出すことになりました。投資を勧められた知人からは、『お前みたいなやつを〝損切り民〟と言うんだ』と笑われました」

今年3月、初の4万円台をつけた日経平均株価だが、4月には米国の利下げ期待の後退などに伴って一時3万7000円割れまで急落。A氏のような投資ビギナーが日々、下がり続ける株価に戦々恐々とし、早々に「損切り」をしてしまったケースは少なくないという。

2月に成長投資枠で、世界の環境関連企業を対象とする投資信託に83万円を投じたB氏（45）もそのひとりだ。

「環境問題は長期的に有望なテーマとよく聞くので、多少の値動きがあっても長期の保有を考えていました。しかし、4月の株価急落を受けて『このままだと大やけどする』との思いが強くなり売却。13万円ほどの損失を出しました。ところがその後、この投信が再び値上がりし始めた。つくづく早まったことをしたと後悔しています」

損切りには至っていないが、半導体関連銘柄を購入したC氏（65）も不安な日々を過ごしている。

「ある半導体商社の株を2月に株価7000円で100株、70万円分購入しました。株価は一時7900円まで上がりましたが、5月には5000円を割り込み、現在約22万円の含み損を抱えています。新NISAの成長投資枠だから長期保有して株価の回復を待ちますが、正直、心配ばかり。

厚生労働省が金融所得に応じて社会保険料の負担を増やす検討を始めたとの報道もあり、投資の旗振りをした国に騙されたのではないかと、疑心暗鬼になっています」

株価下落に怯まない

マーケットバンク代表の岡山憲史氏は「これらのケースはいずれも投資初心者が陥りがちなパターン」と指摘する。

「そもそも新NISAは『長期の資産形成』を目的としています。株価が急落したからと、焦って損切りすれば損失が確定してしまう。長期保有すれば、いずれ株価が回復して収益につながる可能性もあるので、一時的な株価下落に怯まず、長期投資を継続するのが賢明です」

だからこそ長期的な上昇が見込め、リスクを最小限に抑えられる投資先を見極めることが大切となる。岡山氏が続ける。

「現在、新NISAの投資先として、全世界の株式に分散投資する通称『オルカン（※）』や、米国の有力500社の株価指数『S&P500』に連動するファンドが人気を集め、これを推奨する向きもありますが、オルカンも6割以上は米国株で構成され、運用先が大きく偏っていることに注意が必要です。

この先、87年のブラックマンデーや08年のリーマンショックのような金融危機が起こり米国株が暴落すれば、思わぬ損失を被るリスクもある。投資の経験や知識が浅い人はメディアやネットの情報を鵜呑みにせず、長期・分散・積立を第一に考えた投資を心がけてほしい」

ブームや情報に踊らされることなく、新NISAを有効活用したい。

（※）「eMAXIS Slim　全世界株式（オール・カントリー）」の略